

わんりい

165号

2011/7/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。

【表紙写真説明】ギャロン（ギャルモロン＝女王谷）では年に幾度もお祭りが有り、男女が盛装して集まります。

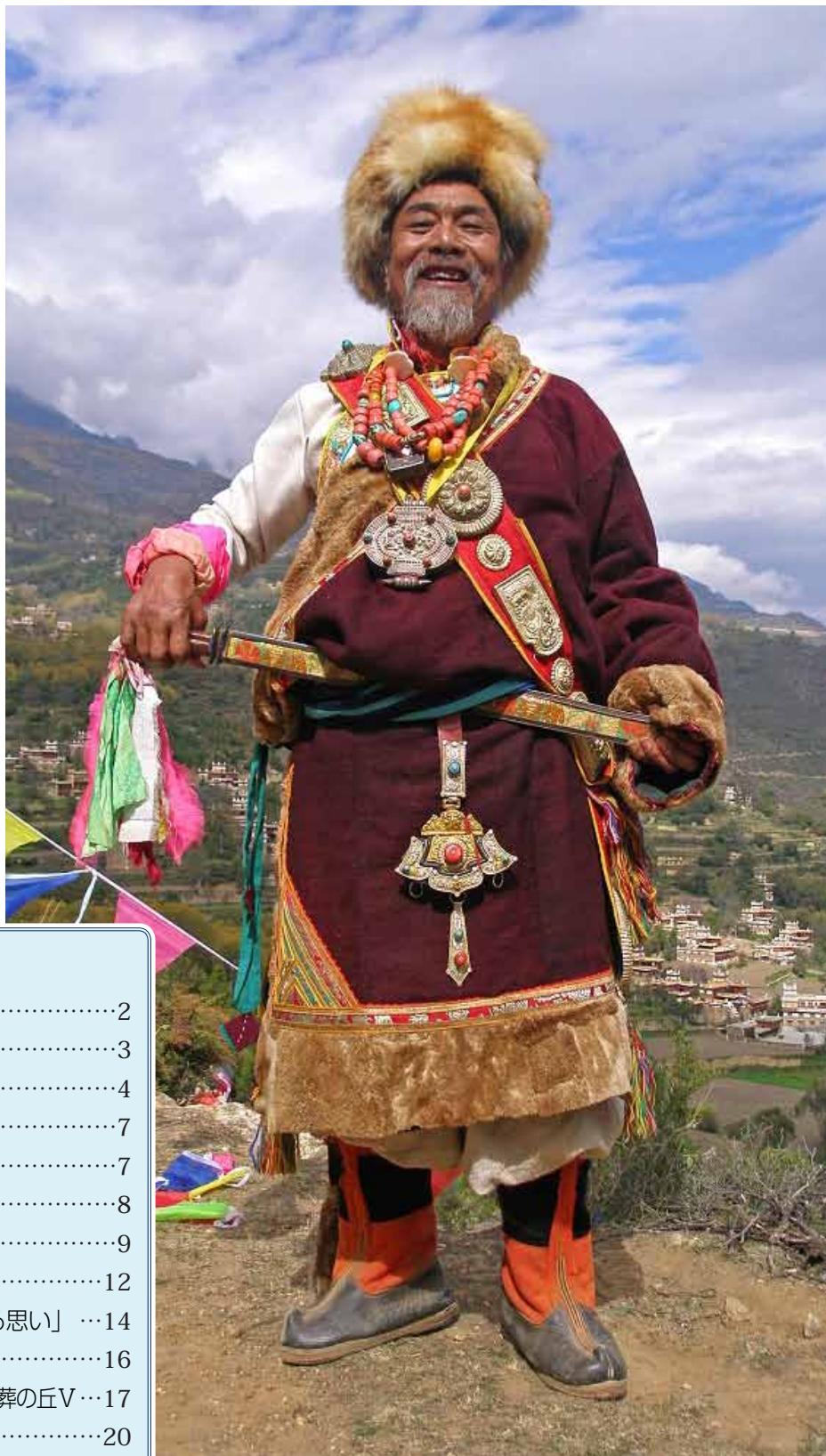
その中でも銀細工や珊瑚等で飾った男性の衣装の出で立ちは艶やかで、祭りでは一際目を引きます。ただ女性の衣装と違って、男性の衣装はギャロン特有ではなく近隣の他のチベット族と同じです。（大川）

■女王谷

女王谷はヒマラヤ横断山脈に在り、中国四川省西部の大金川や小金川などの大渡河（長江源流の一つ）上流域の古代名称である。女王谷は5000m前後の高山を氷河と水流が深く浸食して作った溪谷で、急峻な崖に囲まれた標高2000m前後の川が流れている。

この地域には古代から多くの民族が移住し、先住民と融合してきたが、紀元前後に優れた採金技術を持った一族が移り住み、金を産出する女王谷で繁栄した。その文化的遺産が今も女王谷に継承され、特に石積みの民家や塔、そして民族衣装は独特の美しさを持っている。

（大川健三氏のホームページ「ヒマラヤ横断山脈の女王谷」より抜粋）



‘わんりい’ 165号の主な目次

北京雑感(56)北京の環境対策	2
中華成語故事「滄海桑田」	3
媛媛讲故事(35)怪異シリーズ④浮梁張景令	4
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	7
アジアを読む(78)「森の少年」	7
福建見聞録(8)福建省の事ども	8
黄土高原の旅の終わりに	9
中国・城市(都市)めぐり(7)丹東市	12
アフリカとの出会い(54)「コーヒーにまつわる思い」	14
スリランカ紹介(49)スリランカのお酒2	16
私の四川省一人旅(46)理塘の街で⑥神の岩山と鳥葬の丘V	17
わんりい活動報告「サークル祭・いろいろ」	20
わんりい 掲示板	22

盛装したギャロンチベット族の男 撮影地：四川省^{ān zī dān bā}甘孜州丹巴県甲居集落
2009年10月 撮影：大川健三（四姑娘山自然保護区管理局特別顧問）

今年の北京は、もう既に連日35度を越える暑さだそうです。以前は暑くなると、よく光化学スモッグが発生して、人々を悩ませたものですが、最近はかなり良いようです。とは言っても、外地から北京を訪れると、到着の翌日、街なかの高層マンションでは、朝目を覚ますとすぐに、排気ガスの臭いが鼻をつきます。

東京でも一時期、自動車の排気ガスで大気汚染が酷くなり、大問題になりました。排気ガスの規制を強め、それに呼応した自動車の性能アップで、問題は一部地域を除いて解決されたようですが、随分長い時間を費やしたと思います。

北京では、自動車の排気ガスが問題にされるようになったのは最近、5,6年のことですが、それ以前から、北京は、もう一つ大きな問題を抱えていたのです。それは冬の暖房の煙です。昔から北京の観光には秋が最適といわれ、“秋高气爽”と言う言葉もあります。この“秋”は暖房が始まるまでのことを指します。北京の暖房施設がどんなものか良く分かりませんが、地域暖房であることは確かです。考えられる最小単位は小区ですが、若しかしたらもっと広い範囲を一括で暖房しているのかもしれませんが。かなり古い4,5階建のレンガ造りアパートも、最近建った高層マンションも、各戸・各部屋にスチームの配管が通り、遅くとも11月になると一斉にスチームが入ります。

この暖房は、以前は細かくした石炭を使っていたようで、住宅地の片隅にレンガ塀を廻らせた石炭置き場があって、燃料と並んで燃えカスも山になっているのを見かけたものです。ところが地球規模で大気汚染が問題視されるようになってから、あちらこちらで見かけた石炭の山が見られなくなりました。聞くところによると、北京市政府が、北京市内における石炭ボイラーの使用を禁止して、重油ボイラーへの転換を推進したのだそうです。

石炭置き場の周りには、黒い粉塵があって風が吹くとそれを巻き上げていましたから、燃焼による空気汚染云々と言う前に、空気が埃っぽかったものです。おまけにその頃は街中で地面を掘り返しての工事も多く、そこから出る土埃りも酷くて、北京は埃っぽい街との印象がありました。ところが、この石炭ボイラーの禁止は、北京政府が強力に推し進めたので、石炭置き場は瞬く間に無くなりました。この禁止令はかなり徹底していて、街の食堂が店先にコンロを持ち出して焼く串焼きや焼鳥の燃料まで規制されたとの噂が聞こえてきました。真偽の程は分かりませんが、そういうお店がかなり減ったのは事実です。それと時を同じくして市内の土木工事も一段落したからでしょうか、市内

の埃っぽさは大分緩和されたように感じました。

北京市政府の努力で、石炭ボイラーによる空気中の汚染物質は減少しましたが、皮肉なことに、この頃から自動車による排気ガスが酷くなってきました。2000年頃の北京では、自家用車は無く、走っている乗用車は公用車・軍用車と外交官の車が殆どでした。トラックは当時から夜間に限って市内への乗り入れを許可されていましたが、日中は殆ど目にしませんでした。そのほかはバスとタクシーですが、数が多く、共に整備が悪くて、車体は埃だらけ、タクシーのドアノブが壊れていたりするのはザラでした。マフラーからはモクモクと灰色の煙が出ているものもあって、排気ガスによる大気汚染が目で確認できるような状態でした。

自家用車が徐々に増え始め、これ以上整備の悪い車が増えたら空気はどうなるのだろうと心配しましたが、良くしたもので、自家用車が増え始めると、ある時(2006年頃)タクシーが一斉に新しくなりました。今までは、赤い車体でダイハツとの合弁会社が製造した夏李(シャレード)でしたが、今は韓国・現代の車に替わってしまいました。韓国企業の進出ぶりを再確認させられる出来事でした。バスも次々と新しい車両が投入され、オリンピック前にはすっかり綺麗になりました。

暖房用の石炭ボイラーは無くなり、自動車一台一台の排気ガスも随分改善されましたけれど、自動車の数の増加がせっかくの努力を押し流してしまったようで、北京の大気汚染はあまり改善されていないというより、ますます酷くなっているようです。ナンバープレートの奇数・偶数で走れる日を指定したり、一定期間自動車の登録数を制限したりといろいろやっても、市民の自動車所有熱は下がらないで、自動車は増え続けているそうです。

次に北京政府が打つ手は、電気自動車の普及です。北京市だけでなく中国全土で、排気ガス対策と同時にガソリンの消費抑制を進めるために、ハイブリッド車・燃料電池車・純電動車の導入が検討されていて、各地で実用実験が行われているようです。日本でも地方行政の公用車で電気自動車の使用実験が始まったようですが、中国の路線バスは殆ど公営で、あちこちの地方行政が、自動車メーカーと電気自動車(バス)の購入契約を結んで、車体の完成と同時に路線に投入されるとのニュースが伝えられていますから、中国における電気自動車の実用化は日本より早く実現するかも知れません。あれだけ多い北京のバスが全部ガソリン車でなくなれば、排気ガスによる大気汚染もかなり緩和されることでしょう。北京市政府の行政力に期待して注目したいと思います。

中華成語故事
滄海桑田(そうかいそうでん)

楠木マリ

「私の調べた諺&慣用句」を書いてくださっている三澤さんが、ご都合で3,4ヶ月お休みをされるので、その間、私、楠木マリがピンチヒッターを勤めます。三澤さんが参照された、中国の故事成句集から言葉を選びますが、三澤さんのように詳細に調べてお知らせすることは出来ません。書いてあるままに、少しでも自分の言葉を添えてご紹介しようと思います。

ピンチヒッターの第一打席は、掲題の言葉です。中国語では、「cāng hǎi sāng tián」日本語では「滄海変じて桑田となる」、ご承知のように、『世の移り変わりは激しい』と言う意味です。桑田は陸地の意味で使われ

ています、もともとは晋朝、葛洪の《神仙伝・王遠》の中の仙人の会話に、「拜命以来、既に東海が三回陸地となりました」と出てきます。

昔々、中国の仙界のお話です。王遠と麻姑という二人の仙人がおりました。ある時、この二人が、亀の館で宴会をしようと約束をしました。

約束をした当日、王遠は、沢山のお供を従えて、威風堂々と亀の館へ乗り込みました。王遠とそのお供たちは、到着後、亀の館の面々と互いに挨拶を交わし、その後王遠独り、部屋に落着いて、麻姑の到着を待ちました。

ところが、麻姑はなかなか現れません。王遠は麻姑のもとへ迎えの使いを遣りました。暫くするとその使いが戻ってきて王遠に報告しました。「麻姑さまは、私に先ず、あなた様へのご挨拶をお伝えするようにとお命じになりました。それからおっしゃるのに、『以前王遠様にお目にかかってから500年余りが経ちました。現在、蓬莱仙島巡視の命を受けておまして、もう少して任務を完了いたします。もう暫くお待ちください』とのことでございました」それで、王遠は仕方なく、独り仙酒を飲みながら麻姑の到着を待ちました。

待つこと暫し、ついに麻姑が現れました。一見、年の頃十七、八才と見える美しい姿で、腰までもある緑の黒髪をなびかせていました。彼女の衣もまた非常に美しく、材料は何なのか分かりませんでした。目を見張るような光彩を放っておりました。

お互いに改めて挨拶を交わし、宴会を始めました。供される酒肴の殆どが珍しい草花の類でした。麻姑は王遠



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

に言いました。

「私が天命を拝受して以来、既に3回も東海¹の海原が陸地²に変わるのを目の当たりにしています。今見てきた蓬莱でも、海が以前の半分ほどに浅くなっているのを発見しました。また陸地³に変わってしまうのでしょうか？」

王遠は、ため息をつきながら、

「そうなんだ。聖人たちが皆、『東海⁴の海水が少なくなっている。また土埃が舞うようになるだろう』と話している」

と相槌を打ちました。

道教の基となった、古くからある中国の民間信仰では、天界と人界の間に仙界があり、仙界の住人たちは天帝の命を受けて人界に係わる仕事をすると考えられています。ここに登場する麻姑も、古くから長寿を司る神として崇められ、昔は高齢の女性に、美しい麻姑が桃を捧げ持つ絵を贈り、その長寿を祝福したそうです。これを“麻姑献寿(má gū xiàn shòu)”と言いました。ご承知のように、“桃”は仙界の女王・西王母に庭に生える桃の木に生るもので、不老長寿の象徴とされ、年画などにもしばしば描かれています。麻姑と西王母は重なる所のある仙人ですね。

このお話は仙界の、気の遠くなるような長いスパンで語られていますが、その意味するところは、「世の中の諸事は移ろい易い」と言うことで、敢えて、我々には見届けようが無い自然の変化を引き合いに出していますけれど、3月11日の東日本大震災を経験した後では、今までと違った説得力をもって響いてきます。中国の人々も、自然の変化ではなく、人工でもたらされる景観の変化を、この言葉と共にかみ締めていることでしょう。

浮梁県(江西省景德鎮)の県令¹⁾は張という姓でしたので張県令と称しました。張県令は在任中、仕事の傍ら、私腹を肥やし、江淮(長江と淮河流域の間)で手広く商売をして莫大な財産を築き上げました。

張県令の任期が満ち、都へ帰る途中、いつものように、部下たちを次の宿泊予定地まで先に行かせて、食事の支度をさせました。料理は勿論一般の食べ物ではなく、山海の珍味がいろいろ準備されました。翌日、張県令が華陰県(陝西省)に着くと、下人達はすぐさまテントを張り、酒樽を並べ、料理人が熱々に炙った羊を食卓に置くと、主人を呼んで食事を始めようとしていました。

まさにその時、黄色い服を着た男がつかつかと入って来て食卓の前にどっかりと座りました。下人は「ここはあなたが座ってよいところだと思うか」と叱りつけましたが、その男は、まるで自分の家に戻ってきたかのようで顔色ひとつ変えませんでした。旅館の女主人は「近頃、朝廷に仕える五坊²⁾の若者が、関内³⁾に横行しています。この男はその連中の仲間かもしれません。相手にしない方がよいと思います」と注意してくれました。

そこで、下人は主人になんとかしてもらおうと報告しました。しかし、張県令は「叱らないで、わしが事情を訊いてみよう」と言うと、黄色い服の男の前に来て「どこから来たのか?」と声を掛けました。しかし、男は張県令が何を訊ねても、「はい」とだけ答え、他のことは何も言いませんでした。張県令は下人に爛をしたお酒を持って来るように命じました。

お酒が来ると、張県令は大きな杯にお酒をなみなみと注いで男に勧めました。男は美味しそうにお酒を飲み干すと、今度は羊の肉の方をじっと見つめて目を離しません。そんな男の様子を見た張県令は「羊もよかったら食べても構わないよ」と言いながら、自ら肉を切って勧めました。男の顔にはかすかにためらう表情が見えましたがやはり礼も言わずに黙々とその羊の肉を食べ尽くしました。羊の肉を全て食べ尽くしても、まだまだお腹がいっぱいになった様子が見えませんが、さらにお菓子箱から十四、五個の肉まんに似たようなものを取り出して食べさせました。結局、男は、二斗⁴⁾の酒を飲み、食べるだけ食べて満

腹するとやっと口を開きました。

「こんなに満足できるほど飲んだり食べたりしたのは、四十年前、東の旅館で酔うまで飲んで腹いっぱい食べて以来なのです」

張県令は不思議に思って訊ねてみました。

「それはそれは。満足して頂けて嬉しいです。で、お名前は?」

「私は人ではありません。関内の死んだ人の名簿を届ける冥界の役人です」

張県令は大変驚き、もっと詳しく知りたいと思い更に訊ねてみますと、男は次のように言いました。

「東岳泰山(山東省)の神は、死んだ人間の身体から離れて浮遊している魂を自分のところへ呼んで掌ることになっているのです。冥界には、五岳⁵⁾それぞれが管轄する地域で間もなく亡くなる人の名前を記帳した名簿を五岳に配る役人がいます。私はこそのような役目をしている冥界の役人なのです」

張県令が、

「そうだったか。では、その名簿を私がちょっと見ることはできるのかな」

と訊ねますと、男は、

「はい、構わないです」

と答えて、袋の紐を解き、中から巻物一巻を取り出しました。

張県令がそれを広げてみると、一行目には「東岳泰山君が西岳華山君に告げる文」とあり、二行目には「浮梁県令：罪は、財を貪り、人を殺す。利益をほしいままにし、受けた恩義を忘れる」と目にも鮮やかに書き記されてありました。

張県令は一目でそれが自分のことを言っているのだと分かり、満身から冷や汗が吹き出し、体も強張り、どもりどもり言いました。

「人間は修業の程度によってそれなりの寿命が決まってくるという事を知っています。私は決して死ぬことを惜しむ訳ではありません。ただ、自分はまだ四十代になったばかりで、死ぬことなど考えたこともありません。手広く商売をしているのですから後事をいろいろな人に託さなければなりません。死ぬ時期を延ばす方法は何かないのですか? 私の懐に何十万元のお金があり、それをあなたに全部差し上げて良いのだが、どうだろうか?」

冥界の役人は、

「一食の恩義を返さなければなりません、どんなにお金を頂いてもお金は私には何の役にも立ちません。しかし、可能性のあるただ一つの方法は、元々は仙界にいた仙人の劉綱は天の戒律に違反して、西岳華山の蓮華峰に落とされました。あなたは自分が死にたくないという理由を訴える文章を用意して、急いで劉綱を訪ね、真剣に頼んでみてください。それ以外、他の方法はないと思います」

「丁度、昨日聞いたばかりなのですが、西岳華山の王が南岳衡山の王と賭博をして負けてしまい相当なお金を失って、困っているところだそうです。あなたが用意できる限りの物品を持って華山王の岳廟に参拝し、自分の望みを知らせ、望みが叶えば更に巨額の金品を捧げることを誓って拝んで見てください。華山王があなたの申し出を喜んだら、きっと劉綱にあなたの願いを聞き届けるよう自分の意思を伝えるでしょう。たとえ華山王の力がそこまで及ばないとしても、少なくとも蓮華峰に行く道を教えてくれると思います。蓮華峰に行く道は茨が深く茂り、河や谷に行く手を阻まれる事もありますし、華山王の助けが無ければ辿り着くのはとても難しいと思われます」

と詳しく教えてくれました。

そこで張県令は牛や豚など供え物をもって急いで華山王の岳廟に行きました。岳廟に着き、華山王の像の前で自分の望みを訴え、それが叶えたら必ず千万のお金を納めようと約束しました。念願を掛け終わり、張県令は岳廟を後にし、すぐ蓮華峰を目指しました。

その道中は果たして順調で何事も起きませんでした、道はいつしか奇妙な細い道に変わり、その道を数十里⁶も進むうちにどうにか峰の麓に着きました。そこから更に南東へと曲がって進んでゆきますと、一軒の茅葺きの家が現れ、中に一人の道士が机に肘を付いて坐っていました。

「骨はぼろぼろ、肉は腐り、魂も消えかかり、精神も消耗しきってしまったものが、どうしてここにやって来たのか」と道士は張県令の方を振り向くと言いました。

張県令は、

「喪鐘(死ぬことを知らせる鐘)が鳴り、(人生の時)を刻む漏刻(水時計)が止まり、(生命という)儂い露が乾くと言われるのは、まさに私の命が尽きか

けているとおっしゃっているようですが、私はあなた様が、ぼろぼろになった骨や、腐った身体を元々な頃に甦らせる力をお持ちと伺っています。お願いです。私を黄泉の国の定めから解放する奏文を書いて頂けませんでしょうか？ どうぞその力を発揮して頂けませんか？」

と言いました。

道士は、

「私はかつて隋の朝廷に仕える権力者に頼まれて天帝に上奏し、罪を得てここへ追放された。あなたから何の恩も受けたことがない私に向かってどうしてこのようお願い事をいうのか。天帝⁷に再び上奏文を書かせてこの私をこの寂しい山の奥深く世捨て人としていつまでも住まわせる気なのか！」

と怒りながら言いました。

張県令はなんとかしてもらおうと焦って更に哀願を続けましたが、道士は却って益々怒ってしまいました。と、この時、華山王からの手紙を携えた使者がやって来て道士にその手紙を渡しました。道士は手紙を読むと、声を立てて笑いました。

「華山王の頼みごととあれば応じないわけにはゆくまい。あなたが望んだものが届いたぞ」

そして使者に向かって「承知したと王に伝えなさい」と言うので使者を帰らせました。

「今度も又天帝の罰を買うことになるのだろうか」と道士は独り言を言いながら、玉石で飾られた箱を開き、筆、墨、紙を出し、上奏文を書き始めました。間もなく書き終わると線香を焚き、膝をついて、天に拝礼し、上奏文を呈上する礼儀作法をしました。

暫く待つと、一卷きの書簡が天から舞い下りてきました。その上に「徹」と言う字が書かれ、道士は再び線香を立て拝礼してから、書簡を開きました。書簡には次のような内容が書かれていました。

「張某、祖先から伝えられた徳義に背く行いをしているばかりか、礼儀作法をも無視している。先祖の名声や地位を利用し、不当な手段で官位や、名誉を獲得したが、地位に相応しい仕事をせず、悪質な方法で、莫大な財産をなしたが、公にせず隠ぺいしている。従って、張某は品格に欠け、県令の職にある人間として相応しくない。今調べを進めたが、張某の罪は確実であり、地獄に落ちるべき人間と判断するがどうしてその者の延命を願う奏文を上奏するのか？ しかし、道教の教理に基づき、罪を犯し悪

の淵に落ちたものを救い上げ、時に寛大な処遇により過失を許すこともありうる。従って、張某の願いを聞き届けることにより、彼に前非を悔悟させ、面目を一新させ、ついでには道教の教えを更に広げることができよう。その生を貪るものに更に五年間の寿命を与えよう。しかし、上奏者の過ちは許すことはない」

以上を読み終わると、道士は張県令に次のように告げました。

「世にある人間の寿命はもともと百歳に至るはずだが、喜怒哀楽により心が損ねられる。好きとか嫌いとか、或いは欲により身体の活力を低下させてしまう。また、他人の長所は人に知られぬように計らい、自分の才能をこれ見よがしに自慢することにより知らず知らずに心が乱され、精神が疲れ、身体が本来持っている気を保持することができない。まさに清らかな泉に五味⁸⁾を加えてしまった如く、既に変わってしまった水の味は元通りにはできないのだ。さあ、私の話を耳にしっかりと刻み込んで早く家にお戻りなさい」

張県令はそこで道士に別れを告げ、数歩を行ったところで振り返ってみますと、道士も、茅葺きの家もすでに消えてしまっていました。帰り道は往路に比べ平坦で歩き易く、およそ十里ほど戻ったところに、先日の黄色い服を着た黄泉の国の役人が迎えに来ていました。役人は何もかも知っている様子で張県令に、「よかった！ お目出度う！」のような挨拶をしました。張県令も

「ちょうど私もあなたに恩返しをしようと思っているところですが、お名前を教えてくださいませんか」

と訊ねました。

「私は鐘と申し、生きていた時は宣城(四川省) 県の郵便配達でした。華陰県で死んで、冥界で採用され、この仕事に就いたのです。しかし、生活の辛さは生きていた頃と変わりません」

と黄泉の国の役人は答えました。

張県令は続けて訊きました。

「どうすればあなたの苦勞を免じることができるのか？」

「お約束のように金品で華山王に納めてくださればきっと出来ると思います。もし私が神殿門番の仕事をやらせて貰えるようお願いして貰えれば、神殿のおこぼれで食べていけるようになり、この上なく有難く嬉しいことです。それでは、今日は天界の文

書を配達する時間がすでに半日間も遅れてしまっているのですこれで失礼します」

黄泉の国の役人はそう言いなり、すぐ林の中へ姿が消えてしまいました。

この日の夕方、張県令は華陰県で足を止めそこで一泊し、翌日都へ向かうことにしました。夜になって、下人とこの間の費用を計算すると、華山王に納めた金品は、二万元ほどに達していることが分かり、張県令の気持ちは変わりました。

「こんなにお金を掛けてしまったのか。二万元というお金はわしの十日間の旅にかかる費用になるぞ。天帝の恩恵を受けたいと思ったが、泥人形を拜むために大金を使い、なんと馬鹿なことをしたのだろう」

翌日、東へ行って、偃師(河南省) 県の旅館に泊まりました。そこへ突然、例の黄泉の国の役人が勢いよく門を押し開いて家に入って来ました。役人は文書を手に持って、張県令を怒鳴りつけました。

「どうして嘘を付いたり、でたらめなことを言ったりするのか？ 華山王に願を掛けて、約束を守らないのはどういうことなのか？ すぐにもあなた様は災いに見舞われるぞ。その所為で、あなた様への一食の恩義を返すこともできなくなりました。私の今の気持ちは悔しくも残念でならない。蝸に刺されたようにきりきりと痛んでいる」

そしてそう言い残すとどこかへ行ってしまいました。

黄泉の国の役人の姿が消えると間もなく、張県令は気分が悪くなりました。張県令は役人の言った言葉の意味を悟り、すぐ妻や息子、娘達に遺書を書き始めましたが、書き終わらない内に意識が薄れ間もなく死んでしまいました。(終)

● 注釈

- 1) 県令：県の長官
- 2) 五坊：唐代に皇帝に鷹や、犬などのペットとする動物を狩猟、飼うところを五坊と言う。
- 3) 関内：昔、陝西省の東に「潼関」、西に「嘉峪関」があり、二つの関所の間を『関内』と言った。
- 4) 二斗：容量の単位、一斗(唐代)≒6リットル。
- 5) 五岳：中国の五大名山は五岳と言ひ、東岳泰山、南岳衡山、北岳恒山、西岳華山、中岳嵩山。
- 6) 十里：一里(唐代)≒約560m
- 7) 天帝：道教の神話や伝説の中に一番権威を持つ神で、あらゆる神のリーダーと思われる。
- 8) 五味：酸、甘、苦、辛、塩辛い。

青蛙風に草の香立ちのぼる

wēifēng fú lǜ cǎo
微风拂绿草xiāoyáo qīngwā bùshí tiào
逍遥青蛙不时跳fāng fēng jiá yì piào
芳风颊溢瓢

季语 青蛙，在此句作中表示夏天。日本岁时记中将青蛙列为春天的机遇，但作者在我国呼伦贝尔大草原夏季旅游时仍见到不少青蛙，感到新奇，故作此解。可见，季语也是随着地域而变的。如八月，南半球就当做冬季的季语了。

赏析 我国宋代诗人赵师秀在《有约》中吟“黄梅时节家家雨，青蛙池塘处处蛙”来描绘江南初夏景象，而松本女士则用青蛙跳动掀起的草香描摹呼伦贝尔大草原，别有风情，别有韵味

下手物の並ぶ屋台や生ビール

cài yǒu jiē jiā cài
菜有皆家菜lín cì jiē zhì bǐ dà pái dǎng
鳞次皆栉比大排挡shēng pí sòng qīngliáng
生啤送清凉

季语 生啤，夏。

赏析 没有山珍海味，没有包厢雅座，却能廉价大饱口福，这就是大牌挡长盛不衰的原因。爆查炒，烧烤的腾腾热气，凝聚了四方来客的人气，而那泡沫盈杯的生啤酒，则诱发出人们的食欲，凉冰冰，透心爽。此首作于哈尔滨。



アジアを読む(76)

森の少年

マイケル・ドリス著
新潮文庫

アメリカ先住民の少年モスが「森の時間」(男の子が大人になるために、ひとりで森で過ごす通過儀礼)を経験する物語なのだから、ちょっとした怖さを覚えて読み終えた。礼儀知らずの「お客」が醸し出す不気味さからかもしれないし、著者が自殺した三年前に発表された作品だからかもしれない。そもそも、大人になるための通過儀礼そのものが、恐怖と背中合わせだったりする。

物語はとても象徴的だ。モスの家族は、昔からの物語を大切に、年寄りを敬い、家族や隣人を愛し、困っている人には手を差し伸べる、理想的なコミュニティだ。先祖代々引き継いできた価値観を守ること、彼らは迷わず、自分自身を見失うことはない。そして、「森の時間」とは、森で一人で過ごすことで、自分の存在の小ささ、自分を守るものの大きさを経験し、先祖が守ってきた、そして自分が守るべき価値観を受け入れるための通過儀礼のように思える。

モスと「森の時間」を共有すると、通過儀礼も脱皮の

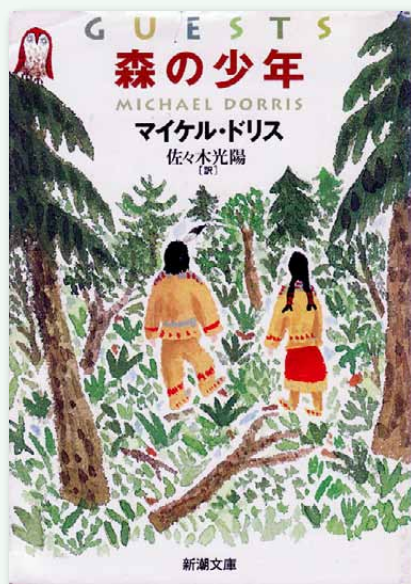
ように何度か繰り返して、大人に近づいていくのだと分かる。モスは「ロスト迷子」だとヤマアラシに言われてしまうが、迷っているうちはまだ大人にはなりきれない。「大人になったかどうか、自分で判断しなさい」とヤマアラシは言い切るが、結構これって難しい。

「森の時間」からモスが帰った家には、ヨーロッパ開拓者と思しき「お客」がいる。この「お客」、モスたちの価値観がまったく通じない礼儀知らずの男たちである。彼らは船でやってきたのだが、モスの家に手ぶらでやってきてご馳走になった挙句、船にまで食べ物を持ってこいと要求する。世界が異なる男たちの出現で、モスの家族は困惑する。

「世界は、わたしたちだけのためにあるものじゃないんだよ」と、

「お客」が寝静まった後、父さんはモスに言う。おそらく、その受容の精神も、彼らが大切に守ってきた姿勢なのだと思う。そう、世界はわたしたちだけのためにあるものではない。子どものまま、気が付かずにいたいことだけれども。

(真中智子)



前回私の福州での生活は人との関わりにおいて大変恵まれていたということを書きましたが、今回は福州での生活を紹介したいと思います。福州は福建省の省都で、人口300万人を超える大都市です。しかし、中国では北京、上海、重慶、広州、南京、天津等の1000万を超える大都市が無数にありますので、福州程度だと大都市と言うのが適当かも知れません。

では、福建省と言うと、どんなイメージが浮かぶでしょうか。どのあたりに位置していると思われませんか。いろいろな方々に尋ねると、よく知らない方が多いです。福建省に対するイメージ? — 全くと言ってよいほど、浮かんでこないようです。それは福建省がどの辺にあるかが分からないということもあるでしょう。福建省は東は浙江省、西は広東省に挟まれており、南シナ海に面し、また平野が少ない山地の多い地です。日本へ来る出稼ぎ者が一番多い省、台湾に一番近い省(金門島まで船で1時間で行けます)、客家及び華僑の故郷等と言えるでしょう。

その省都が福州です。福州は歴史のある都市です。また、19世紀後半にはアヘン戦争の結果、アモイとともに西洋列国の要求で開港され、領事館や教会、商館、学校等が建設されました。今でもその当時の建物がたくさん残されています。福州在住日本人はそんなに多くありません。恐らく数百人程度だと思われれます。日本企業の進出も見られますが、多くはありません。むしろアモイの方が多いかもしれません。しかし、日本企業が少ない分よくまとまって、日本企業会や日本婦人会等の組織があり、様々な集まりが持たれています(私はあまりそのような日本人会の集まりにはでませんでした…)。

私がいた大学は福州の郊外にあり、交通がかなり不便でした。中心部に出るにはバスの便しかありません。土・日曜日等に出かけることが多かったですが、寮から校門まで10分、校門からバス停まで10分、さらにバスに揺られて30分ほどで、大体1時間はかかります。現在、大学の近くを通る地下鉄工事が行われており、いずれ中心部に出るには便利になるでしょうが、あと数年は要するかと思えます。市内には電車は通っていません。その分バスは網の目のように縦横に張り巡らされていますので不便はありません。ただ、複雑すぎて私のよ

うな外国人に分かりにくいところがあり、時々間違えて別な方向へ行ったりして困ったことがありました。

日常の買い物は、大学構内に3軒あるコンビニエンスストアで必要な日用品は買うことが出来ますからそんなに不自由ではありません。しかし、肉、魚、野菜、乳製品等を買おうとすると、街まで出かけないとだめですね。近くにローカルな市場がありますが、少々品質などの面で心配でした。市内まで行けば、アメリカ系のウォールマート、フランス系のカールフル、ドイツ系のMETRO(麦使龍)といった大きなスーパーマーケットがあり、これらの店ならばまずは安心でした。

日本の食材を扱う太平洋百貨というスーパーマーケットが1軒あり、商品のほとんどは日本からの輸入品や中国で作られた中国産日本食品などが売られています。ただここは値段がべらぼうに高く普通の店の3~4倍の値段で、裕福な福州在住日本人向けの店です。ここでの買い物は、私にとっては贅沢だと考え、3回行っただけでした。私が必要としていたものはパン、バター、チーズ、スパゲッティなどでしたが、中国人向けの店ではあまり売られていません。パンは菓子パンのようなものばかりでした。好みは本格的なフランスパンやドイツパンですが、たまにフランスパンは置いてある店があっても柔らかすぎて好みではないものが多かったです。前記の日系の店にはフランスパンや本格的な日本のものと変わらない食パンがあるのですが、但しフランスパンが1本50元もします。これでは何度も買えません。

普通のスーパーでは、バターやチーズなどはあまり見かけません。ごく僅かに店の隅の方に置かれていて、探すのに一苦労しました。また、スパゲッティに至っては全く見かける機会がなかったのですが、或る時、中国麺の売り場でやっと1種類を発見しました。学生に「イタリア麺」を食べたことがあるかと訊いたことがありますが、知らない、見たこともないという答えが返ってきました。

どこの国でも地方では食べ物に関しては保守的で、中国でもごく多分に漏れません。福州にも日本料理の店もかなりありますが、日本人とごく一部の中国人が利用するくらいで、値段が高いこともあり普通の人は利用

しません。福州は又、食べ物の西洋化という意味で、上海あたりと比べると遅れていると感じざるを得ません。上海でパン屋に行けば、本格的なフランスパンもドイツパンも、日本の山崎パンまでが出店している程で、選り取り見取りに好みのパンを選べますから、ハードパン好みの私も不自由はしません。日本でもよく見かけるPUALという店もあります。福州では全く見かけないに等しいスパゲッティも上海ではいろいろ選んで食べることも可能です(ただし、どの店もゆで加減が柔らかすぎるとは思いますが)。

今回は買い物や食べ物に終始してしまいましたが、次回は違う面から福州や福建省を見てみたいと思います。(続く)



アメリカ系のスーパーマーケット・ウォールマート

黄土高原の旅の終わりに

有為楠君代

中国の列車の旅に憧れを持っていた私は、常々中国の内陸部は列車で移動したいと思っていた。以前一度地方から北京の大学に來ている学生達と接触する機会があった時、「帰省するのに何時間かかるの?」と訊くと、「14時間」とか「16時間」という答えが多くて、驚くと共に、是非そんな列車に乗ってみたいと思った。本当は「日中、果てしない大地をひた走る列車」の車窓から周りの景色を楽しみたいと思ったのだが、北京を出発する長距離列車は皆夜行列車で、寝ている間に目的地に着いてしまうことが多い。時間的には有難いことだがちょっと味気ない。

今回の旅の目的の一つは、中国の列車の旅を満喫するところにあった。最初の計画では北京から延安まで列車で行くことになっていて、西安に朝到着する列車がそのまま延安まで行くので、西安—延安間は昼間の景色をゆっくり楽しめると思っていた。しかし列車が急に西安止まりとなり、苦勞の果てに延安まではバスで行ったのだった。帰りの西安—北京は飛行機でも良かったのだが、憧れていた列車の旅だからと、渡邊さん、木ノ内さんを無理に誘って列車にしまった。

だが憧れと現実の落差は、想像以上に大きかった。グループ旅行だと、荷物はまとめて運んでくれるので、身軽なだけでたちで乗り降りができるけれど、個人旅行だと、荷物を全て自分たちで運ばなければならない。ホームへ下りる階段などは乗客が一斉に先を急ぐので、危険さえ

感じた。中国でもエスカレーターはかなり普及してきたが、最も必要と思われる駅に少ないのはどうした訳だろうか。これも国有鉄道の宿命だろうか? 北京西駅ですら、正面入口にこそエスカレーターが何基も並んでいたが、その先のプラットフォームに降りるところは狭い階段だった。照明も充分ではない階段を必死になって下りながら、入り口のエスカレーターを空々しく感じたものだった。

西安駅も構造は北京西駅と同じ様で、階段をやっとの思いで下ると、列車は既に待っていて、階段を降りてすぐの車輦が我々の乗る7号車と表示してあった。しかし、7号車の乗車口は閉じていて、1輛先の6号車、7号車から遠いほうの乗車口で係員が改札をしていた。われわれもそこから乗り込み、6号車の中を歩いて連結器を通り過ぎ、7号車で指定のコンパートメントを探したが、そこには既に先客があった。お互いがそこは自分たちの席と確信していたが、確認に時間がかかり、我々のコンパートメントはもう1輛先、つまり我々の感覚では8号車に当る所にあることが、大分経ってから分った。

一先ず落ち着いて考えてみるが不思議でならない。階段を降りたとき、すぐ近くの車輦の横腹に「7号車」の表示があり、我々は6号車から乗ったので、6号車一輛分歩いて連結器を通り過ぎた車輦が7号車だと思ったのに、実際は、もう一輛分歩かなければ7号車にならなかった。「馬大哈」な私だけが思い込んだのならまだしも、木ノ内さんも、いつも冷静沈着な渡邊さんもこの位置関係をお

かしいと思ったそうで、やはり何かが変わったのだ。

3人でいろいろ考えて得た結論は、我々が見た車輛の横腹の号車表示が間違っていたのではないかというものだった。3人で納得して「ちょっと見て来ようか」と思った時には、列車は既に動き出していて確認は出来なかった。日本ではちょっと考えられないことだが、「中国では充分有り得る」というのが3人の一致した意見だった。

荷物を下段寝台の下と上段寝台足許のスペースに収めて、ヤレヤレと寝台に腰をかけると、向かい合った二人の膝と膝がくっつくほどに狭い。一等寝台(軟臥・ルアンオウ)なのに随分狭い。往路も同じ列車に乗ったが、あの時は先行きの不安で寝台の狭さなど気にならなかったようだ。以前、長沙までやはり一等寝台に乗ったが、その時はこれほど狭くなかったような気がする。あの列車は北京—深圳のドル箱路線を走るので、西安—北京の列車より良い車両を使っているのかもしれない。

朝、明るくなって来て懐かしい北京の郊外を走っているのが分かった頃、北京西駅へ迎えに来てくれる筈の友人とうまく会えるかちょっと心配になってきた。会えないと今日の宿泊場所が分からないのだ。北京は飛行機を乗り継ぐための1泊だから安い宿で良いと思い、以前利用したことのある北太平庄、三環沿いの「遠望楼」という安宿にしようとネットで調べたが連絡先が分からなかった。友人にメールで予約を頼んでおいたのだが、出発直前に「遠望楼」は予約出来ないのだから近くのホテルを予約したとの連絡を貰って、名前など詳しいことは何も聞いていないのだ。到着のホームから携帯に電話してみると、もう待っていてくれるとのことと一安心した。

タクシーで連れて行ってもらったところは、やはり北太平庄。何故か「維也納(ウィーン)」と言って、深圳に本部がありチェーン展開している外資系のビジネスホテルで、開店したばかりで明るくて感じの良いホテルだった。

到着は9時頃だったが、部屋が空いているからとチェックインさせてくれた。ツインルームにもう一つベッドを入れて3人部屋にするよう頼んで荷物を置いて近くの食堂で朝食を摂った。

聞けば、「遠望楼」は最近の北京市の規則で、外国人を泊められなくなったのだそうだ。「遠望楼」は2ツ星のホテルで設備はあまり整っていないが清潔で泊まり心地は良かったのに、3ツ星以上のホテルでないと外国人を泊められなくなったのだそうだ。ちょっと残念な気がする。

朝食を摂りながら今日の予定を話し合う。友人は仕事があるので、一旦別れ夕方、西単の本屋さんの前で落ち

合うことにする。私達は、玉淵潭公園の八一湖から頤和園南門まで、市内運河の船旅をして、その後地下鉄を使って西単まで行くことにした。

市内北の方の地下鉄はまだ乗ったことがないので大体のルートを教えてもらったが、その時ついでに舟は動物園の裏から出るのに乗れば良いと勧められた。玉淵潭公園からの何回も乗っているが、動物園からの乗ったことが無く、地図の上でもどのルートを通るのか見つけられなかった。良い機会だから乗ってみようと考えた。玉淵潭公園より動物園の方が近い。しかしこれが間違いだった。

動物園から15分も乗っただろうか、すぐ近くの紫竹院公園まで来ると船を降ろされ、公園内を4,5分歩いて玉淵潭から来た船に乗り換えさせられた。乗換えがあるなんて、友人は言わなかったし、切符売り場にも、動物園～紫竹院～頤和園とルートが書いてあっても、舟を乗り換えるとは書いてなかった。渡邊さん、木ノ内さんにはゆったりとした船の旅を紹介したかったのに、途中で乗り換えたのが非常に残念に思えた。

50分足らずで頤和園南門に到着した。船は頤和園の中に入って行くのだが、我々は中に入らず頤和園南門で降りて、バス停の溜まり場へ教えられたバスを捜しに行った。日本語で話しながら捜していると、中国の方が日本語で話しかけてきてくださったので、近くの地下鉄の駅まで行くバスを捜していると話すと、「ここで待っていて、〇〇番のバスに乗れば良い」と教えてくださった。暫くしてやって来た一台のバスを見ると、先ほどの人が「このバスも地下鉄の駅へ行きますよ」と言いながら、ご自分達も走ってそのバスの止まるところまで走ったので、我々も遅れじと走って乗り込んだ。教えていただいた地下鉄の駅は把溝村、友人が言っていた駅より3つ手前の駅だった。

後は教えられたとおり、中国のシリコンバレーと言われる中関村近くの、海淀黄庄駅で乗り換えて、西単駅まで行くことが出来た。この間、把溝村から計っても、電車に乗っていた時間は正味20分もなかったのではないと思われる。以前は、この上の道をバスでよく通ったが、地下鉄の工事のせいもあって渋滞が酷く、海淀黄庄から西単まで3時間もかかったこともあったので、正に「隔世の感」がある。

西単の本屋さんで、中国語の教科書や北京の地図を買って外に出るともう約束の時間で友人が待っていた。我々のリクエストはお土産にする食品類を買えるところ

に連れて行って欲しいというもので、友人はタクシーで崇文門へ連れて行ってくれたが、車を降りて茫然としているのが印象的だった。そこは大きなスペースに小さな店をぎっしりと詰め込んだ食料品のマーケットのようなところで、随分賑わっていたところなのに、7月半ばに閉鎖していた。仕方が無いので、別のずっと小規模な店で間に合わせた。

余分な動きをしたので、買い物を済ませた頃にはちょっと疲れを感じて、夕食もそこそこにホテルへ帰った。ホテルでは、翌日の朝が早いので先ず荷物の整理を終わらせて、いざ就寝という段になって、エクストラベッドのマットが一枚足りないし、洗面用具も追加の一人分が無いのに気が付いた。不足の部分をフロントに連絡して入れてもらおうと思ったが、もうかなり遅くて、これからバタバタするより早く寝たいということになった。

洗面道具は各自持っているのをを使うので問題ないが、ベッドのマットはどうかと思ったけれど、エクストラを使ってくれることになった木ノ内さんがこのままで良いとおっしゃるので追加のマットを要求しなかった。しかし、木之内さんは、何処でも寝られる私と違って寝つきの悪い人だったのだ。きっと殆ど眠れなかったのではないだろうか。申し訳なかったと反省している。朝は、食堂がまだ開いていなかったの、直ちにチェックアウトを済ませて、頼んでおいたタクシーに荷物を積み込んで空港へ出発したのだった。

中国のホテルは未だにチェックインの時、宿泊費よりも多い保証金を先に払って、チェックアウトの時、フロント係りから連絡を受けたルーム係りがその部屋に出向き、備品等の破損や持ち出しが無いかを調べて、問題がなければ、保証金から部屋代を差し引いて差額を返してくれる方法をとっている。

フロントでルーム係りから連絡が来るのを待つ間に、フロント係りに雑談の感覚で、エクストラベッドのマットと洗面道具が2人分しかなかったことを話した。フロント係は、ルーム係りからの連絡があった時確認をしていたようだが、私には何も言わずに計算をして保証金の返金をしてくれた。

保証金500元から部屋代を引いて140元の返金があった。友人は、「部屋代は380元。3人使用だから追加料金がかかる」と言っていたが、実際に払ってきたのは3人で360元、本来の部屋代より20元安く、一人当たりの計算では120元になる。木之内さんに辛い思いをさせて手に入れた安価である。空港で最後の旅費計算を

した時にやっと気が付いた。

それにしても、あのフロント係りの女性は、値引きしたことを一言も言わなかった。私は状況を話したがクレームのつもりは無かった。しかしホテル側は自分たちのミスを認めて誠意を見せてくれたのだが、何も説明が無いので、私は通常のやり取りの感覚で、「謝謝」とだけ言って受け取ってしまったのだった。

中国でこんな経験をしたのは初めてだ。今までは大抵、声高に自分の言い分を主張して、やっと認めさせても、こちらが受け取るものは投げるようにしてよこすことが多いので、この対応では、こちらは拍子抜けも甚だしい。外資の入った企業のせいだろうか？

こんなわけで、今回の2週間の旅では、昔からの中国らしさ(と言っても、私の「昔」は高々15年程のものだが)にも、中国としては珍しい事態にも遭遇した。勿論、初めて訪れた黄土高原と西安の印象も加わって、私の中の中国はまた一回り大きくなったような気がする。

今回の最大の収穫は、中国の旅には、荷物を背負うのが一番良いと知ったことである。スーツケースを引いて歩くのは、北京や西安の街中はともかく、鉄道の駅では北京や西安でさえもちょっと不便を感じた。今回は、木ノ内さんだけが大きなリュックサックを背負っていて、担ぎ始めはよろよろするので心配したけれど、一旦背負ってしまうと後はすいすい颯爽と歩いていた。北京に宿をとっておいて、大きな荷物はそこに預けて身軽になって地方へ出かけるという知人もおられるが、それも良い方法だと思う。次に地方へ出かける機会があったら、身軽ないでたちでもっともっと楽しめるようにしたいと強く感じた。

ちょっと斜に構えた視点から旅の様子をご紹介したが、皆さんの中国に対する興味を引き出せたら望外の幸せと思う。中国は文字通り「奥の深い国」。行くたびに違った顔を見せてくれる。いろいろ不満もあるけれど、私の大好きな中国。皆さんにも、ご自身の目で見、肌で感じていただきたいと切望している。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

「丹東」というこの街について、私は大連に赴任する前は聞いたことがない街であった。友人が日本との関わりがいろいろあった街だと言うので、改めていくつかの書物で調べてみると、是非一度行かなければと思った。

丹東は、大連から遼東半島の黄海沿いに東に約300km弱のところにある。鉄道は走っていないので、大連駅前から長距離バスに乗って行くのである。

4時間近くかかるが、途中比較的綺麗なサービスエリアに1回だけ停車し、乗客はトイレに行き、そして食物などを求める。しかし日本の高速道路のそれをイメージすると全く違う。この高速道路は「大庄高速」と言うが、休日でも余り交通量は多くないし、人もまばらでサービスもよくない。日本では土・日ともなればマイカーで観光に出る人が多く混み合うが、少なくとも東北三省ではあまりそうした習慣はないようで、その分混まないのでもいい。

この地方の高速バスには何度か乗ったが、運転手の服装はポロシャツにジーパン姿である。日本と違うのは、運転手は、近くにいる乗客と平気で世間話をし、携帯に電話がかかって来れば、電話しながら片手でハンドルを持ち、100kmのスピードで運転するのである。乗るたびにこわい思いをさせられたが、法律はどうなっているのであろうか。

高速道路の沿線は、ゆるやかな丘陵が続き、見渡す限り畑である。多くはトウモロコシ畑であった。第二次世界大戦時、ソ連が不可侵条約を一方的に破棄し、参戦したことで、満州にいた開拓農民がきわめて過酷な状況に置かれ、このような畑の中を必死で逃げて行く姿を思い出させられた。

丹東市といえば、地理的特長をまずあげなければならぬ。鴨緑江という全長900kmの大河が流れている。水



「一步跨」と書かれた大石。対岸の北朝鮮まで一跨ぎだ



丹東市のおおよその位置

源は北朝鮮との国境にある海拔2750mの長白山(北朝鮮では白頭山と呼んでいる)である。この大河の対岸も北朝鮮である。この国際河川は川幅も広く水量も豊かである。すこし川をさかのぼると、中洲があちらこちらにある。後述する虎山の万里の長城(最東端)のすぐ下あたりは中洲がありそこに鉄条網が続いているところがある。川のどのあたりが国境なのか分らないが、このあたりは中国の領土のすぐ近くまで北朝鮮領土となっていて、中洲との間は10メートルくらいしかなく、鉄条網がなければ簡単に分流を渡り北朝鮮に行けそうなのである。ここの川岸に大きな石がおかれ、そこに「一步跨」(中国語でイーブークウという)と刻まれて観光名所となっている。つまり一步で向う側にまたがって行けるというくらいの近さに北朝鮮があるという意味である。若い男女がこの石の前でしきりにシャッターを切っていた。

この大河には両国間にいくつかの橋が架っているが、「中朝友誼橋」という丹東市の橋は、これらの橋の中で一番大きく、中国から北朝鮮への援助物資の多くがこの橋を通過していく。鉄道との併用の橋であり昨年中国を訪問した飛行機嫌いの金正日は、この橋を渡って大連などに行っている。この鉄橋と並行する形で100m程下流にもう一つの鉄橋がかかっている。これが丹東市一番の観光地とも言えるものである。

この橋は「断橋」と呼ばれている。名前の由来は川のちょうど真中でこの橋が途切れているからだ。北朝鮮側は川にコンクリートの橋桁だけが残っている。この鉄橋は、旧日本軍が1909年に軍用鉄道の一環として作ったものだ。つまり日露戦争後、東北地方に力を注ぎ、朝鮮半島からこの橋を通り奉天(今の瀋陽)までのルートが完成したのである。そしてこの橋の中央は、大きな船が通るとき回転し



断橋の上から撮影の「中朝友誼橋」手前に断橋の手すりが見える



「断橋」の中国側。北朝鮮側は橋桁のみである



鴨緑江に架かる、中朝友誼橋と断橋。上の黒い筋が「中朝友誼橋」で、そのすぐ下の「断橋」は北朝鮮側の半分が壊れているのがよく分かる

Google Earth から制作。画像は 2010 年 10 月

て通過できるようになっていた。当時の日本軍の技術力には感心させられるばかりだ。

このように作られたりっぱな鉄橋は、1950年に勃発した朝鮮戦争の時、米軍機が爆撃し、半分破壊されてしまったのである。その様な事情で橋としては機能できなくなってしまったが、これが今では有名な観光スポットとなり、丹東市の大きな観光収入となっているのだから運命は

分らないものである。北朝鮮側に橋が残っていれば、北朝鮮の観光収入となっていたであろうに……。

断橋のすぐそばにボート乗り場がある。友人の話ではモーターボートに乗ると対岸近くまで行けるといふ。さっそくオレンジ色のライフベストを着用し友人と乗り込んだ。白波をけたてて対岸に向う。ほどなく小さな造船所や民家がすぐ間近に見えるところに来た。建物はくすんだ感じだし、造船所の設備も古ぼけたものである。人もいたが動きも鈍く、まるで死んだ町のようなようであった。高い建物はなく所々に3階建程度の建物を散見するだけである。頭をめぐらせて中国側を見ると、高層ビルが林立し、活気と明るさに満ちあふれた風景である。川の両岸で現代と100年前の昔を同時に見られるというのは異様なものである。これでは夜闇に紛れて川を渡る脱北者が多いのは、当然だと思った。

ただここは北朝鮮の「新義州」という都市の郊外なので割り引いて見なければならぬであろう、この都市は北朝鮮では首都の平壤に次ぐくらいの都市である。実は丹東は日本軍が作りあげた町であるがこの新義州も同様なのだ。日清戦争後、日本軍は朝鮮半島を占領し1904年から鉄道建設に着手しその北の終点が新義州となった。昔からあった義州という街と区別するため近くに作ったこの街を「新義州」と名付け、多くの日本人も移住した。新義州は工業の街で街並みもきちんと整備されているらしい。

ところでご記憶の方もあろうと思うが2010年8月、この地方は大雨が続きこの鴨緑江が氾濫し、中国側では5名の死者・行方不明者が出、20万人以上が被災したのである。護岸がしっかりしている中国側でさえかなりの被害が出たのであるから、新義州の街は想像できないくらいの被害が出たと思われる。新聞に載った航空写真では同街の陸地と川の境い目が分らず、あたり一面海のようなようであった。

丹東は文字通り北朝鮮と一衣帯水の位置にあるので市内は朝鮮料理店や川沿いには土産物店が軒を連ねている。店では金日成のバッジや切手帳、絵葉書等売っており、別のところではチマチョゴリを着て写真を撮る店がいくつもあった。

断橋の次に有名な観光スポットは虎山の「万里の長城」である。友人によると鄧小平の鶴の一声で復元が図られたとか。長さは1kmもないが、北京郊外の八達嶺などで見られる万里の長城の城壁や見張台と殆ど変わらない。これを見るまでは万里の長城の東の端は山海関かと思っていたが、ここがそうだと知らなかった。一番高い所に登ってみると、眼下にゆったりと鴨緑江が流れすばらしい

眺望である。一見に値する。

そこを見たあと友人に「この近くに『九連城』という町があると思うがそこに行きたい。」と頼むと、「何でそんな誰もいかない所に行きたいのか」と言うので、日露戦争の激戦地の一つだと言うと「物好きですね」と言いつつタクシーの運転手に行先を告げた。

当時ここにはロシア軍の砲台があり、陸戦における最初の砲撃戦が行われたという。火器に勝る日本はこれに勝利し、ロシアはここを捨て後方に退却した。この戦いは黒木為楨(ためもと)大将率いる第一軍が北朝鮮の首都平壤近くの海岸に上陸し、丹東(当時は安東という地名であった)のすこし上流を渡江、この九連城を通り、奉天まで攻めのぼっている。このあたりの状況は司馬遼太郎の「坂の上の雲」に詳しい。戦費を外債でまかなおうとした日本は、この戦いに圧勝したことにより、報道が世界に伝わり、外債募集に好影響をもたらしたのである。1904年のことである。

それから100年余りたった激戦地には石碑があり、その昔この場所で日露両軍が戦ったことが記されてあった。

しゃがんで石碑に手を合わせた。あたりはあまり手入れもされておらず「夏草やつわものどもの夢のあと」といった風情であった。再び市内に戻り「三千里」という名の朝鮮料理店で焼肉料理を堪能した。

さて最近のニュースで知ったが、この鴨緑江の下流に「鴨緑江界河公路大橋」という中朝を結ぶ大橋が着工されたという。総工費約18億元(約230億元)はすべて中国側が負担するとのことだ。上海万博の北朝鮮パビリオンもそうであったが、何から何まで他国に頼る北朝鮮という国は誠になさけない国である。

東北三省は歴史を振り返ると、日本が深くかかわって来た地域である。この丹東はそうした歴史を色濃く伝える都市のひとつであるが関心のある方は是非行かれることをおすすめしたい。

帰りは、丹東駅(瀋陽へは鉄道が走っている)前からマイクロバスで大連に戻ったが、駅前広場には、周囲と調和がとれないくらい大きな毛沢東像が北京(?)の方向を指して立っていた。

アフリカとの出会い (54)

コーヒーにまつわる思い

アフリカンコネクション 竹田悦子

夫の実家はコーヒー農家。今から8年前、私は彼の実家を訊ねた。

そこは農園と言うにはあまりにも小さい場所で、コーヒーの木が数本大切に植えられていた。初めて見るコーヒーの赤い実がとても赤かったのをよく覚えている。そこは、標高5199メートルのケニア山の麓に位置し、標高1600メートルに位置する首都ナイロビよりも更に高い標1700メートルに位置する中央ケニア州のニエリ県。昼夜の気温の高低差は激しい。

コーヒーの木は、標高1400メートルから2000メートルの涼しい気候を好み、火山性の乾いた土壌を好む。年間を通じて涼しく、農業に適したこの土地は、白人入植者が見逃すわけがなく、彼らはこの地域を「ホワイトハイランド」と呼んだ。そしてケニアが独立するまでの長い間をイギリス人が統治し、大農園を所有してきた。なるほどニエリの中心街を歩くと、イギリスのコロニアル風の町並み、建物が点在し、一見するとイギリスにいるような錯覚を覚える。

夫の祖父は若い頃、イギリス人所有のコーヒー農園で働いていたという。彼は当時の雇い主のことを今でも「muzugu(ムズング、白人の意)」と呼び、「白人の下で

コーヒーを作っていた」と昔のことを表現する。私が結婚して家族となった今でも、英語を話しながらない1人だ。植民地時代のケニアの過去のことあまり話したがらない。祖父は性格的にとてもおしゃべりな人だ。なのに、白人の下で働いたことと、ケニアの独立戦争に参加したことについては全くしゃべらない。

ケニアの独立戦争は、この地域で始まっていったとされている。大土地所有のイギリス人入植者に対して、労働者であったキクユ族が土地の解放を求めて武装し、「マウマウ団」という武装集団を結成し、のちに初代大統領となるケニヤッタを中心としてケニアの独立を勝ち取るきっかけとされている。そのマウマウ団にいたという叔父も又そのことについては、誰にも全く話さないらしい。

ケニア独立後1964年頃、叔父はコーヒーを育て始めた。その時に植えたコーヒーの木は、今でも現役だ。私が見たコーヒーの実ほまさにその木であった。コーヒーの実ほ年2回収穫される。5月～7月に1回。9月～12月に1回。祖父は、収穫したコーヒーの実を袋につめ、協同組合の仲買人に売り、組合が、政府管轄のオークションに売り、売値の中から利益を貰うという形で生

計を立ててきた。コーヒーなどの農産物は、一次産品と呼ばれ、いろいろな条件に左右されやすく、価格が一定しないのが特徴で、ケニアのコーヒーの値も市場で長い間低迷を続けてきた。

コーヒー農家としての生活は、厳しいものだったと想像できる。実際ケニアのコーヒーの生産及び輸出は、1980年をピークに減少し、生産性は国際的に見ても決して高くない。特に小規模農家の耕作放棄、生産者の高齢化及び跡継ぎの不足が現代の問題でもあった。

そんなケニアの貧しさの象徴でもあるケニアの小さなコーヒー農家だが、近頃、驚きの報告を受けた。「1キロ12ドルで買います」というものだ。祖父が去年納めたコーヒーの総生産量は500キロほどだった。なので、6000ドル。日本円に換算すると、50万円ほどになるだろうか。祖父は、過去30年以上のコーヒー作りの歴史の中で、そんな大金を手にする事はなかった。彼の驚きは日本にいる彼の孫にまで伝わってきた。それを聞いた私の夫はとて驚いていた。祖父は80代、父も60代、それぞれの子供達が学費など一番必要だった時代に富をもたらさったコーヒー。適正な価格での買い取りや価格の安定のための施策について何もしてこなかったケニア政府。コーヒー農家であり続けることには家族みんなの沢山の負担と犠牲があった。

ケニアでは、紅茶を飲むのが一般的だ。実際、夫の家ではコーヒーの豆も粉も買ったことがないらしい。ケニアの人は、「コーヒーはお金持ちの飲み物」という。実際、コーヒー豆の75%は、ヨーロッパ、アメリカを中心に輸出されている。

「今年は、コーヒーを飲んでみたい。コーヒーはカフェに行けば飲めるのか？」と祖父は夫に電話で聞いていたらしい。今では、ナイロビを中心にたくさんのカフェが出来ている。エスプレッソ、カフェオレ、アイスコーヒー、コーヒーフロート、何でもある。でも祖父が飲んで見たいと言ったコーヒーはなんと「ネスカフェ」だった。

ネスカフェは、ケニアでも有名なインスタントコーヒーで、小分けにした袋に10グラムくらい入って5円くらいでどこでも売っている。それを買って飲んでみたいと言っていた。

生産者の祖父が、ずっと口にできなかったコーヒー。「もし価格が安定していて、家族をきちんと養っていた



コーヒー豆を摘むガスバレイさん中央ケニア州ニエリ県キアカンジャ村の実家で

のなら、僕の人生は別のものだっただろう」と長い人生を振り返る祖父。経済的に恵まなかった叔父。でも私から見ると、優しい奥さんに、沢山の子供に孫、ひ孫。大きな畑、に、たくさんの野菜。家畜。彼を慕う家族。人が人生で得るべき稔りの全てを得ているのではないかと、思ってしまうのは私がきっと何も知らないからだろう。

叔父の指を見たことがあった。はさみのせいで、指が変形している。そんなにまでして育てたコーヒーで、家族を養えなかった悔しさだろうか、コーヒーにまつわる過去については何も話さないのである。

最近のニューヨークの先物取引市場では、コーヒー先物市場で75%以上の値上がり記録された。今、コーヒーの豆の値上がりは、市場を熱くしている。

翻ってケニアの祖父。コーヒーの値段が上がっても下がっても、いつもと同じはさみで、いつもとおなじ場所で、いつもと同じコーヒーの木に話しかけているんだらうなあと想像している。



真っ赤な実が美しいコーヒーの実

前回に紹介した椰子酒のラーを更に蒸留するとアラックになります。味はラーが乳酸飲料の様だったのとは全く異なります。今年の‘わんりい’の新年会で味わっていた方もいらっしゃると思いますが、アラックは少し甘味があり、例えるならばラム酒に燻し味が加わった様な感じですか。アルコール度数は25～40度と強めです。僕は単純にロックで呑むほうがアラックそのものの味わいがある好きですが、スリランカの人達はアラックを飲む際にはコーラやソーダ等で割って飲むのが一般的です。おつまみにはココナッツにチリ・タマネギのみじん切り・砕いたモルディブフィッシュ(無発酵の鰹節)・塩とライムを和えたポルサンボル、豆の粉に塩を加えて練り油で揚げたパバダン、カシューナッツのチリ炒め等が良く合います。

忘れてはいけないのがビールです。スリランカを代表するビールと言えばライオンビール、こってりした飲み口のライオンスタウト(黒ビール)はモンドセレクションの金賞を受賞しました。ライオンラガーもスッキリとして口当たりが良くて人気があります。このライオン社は1881年に創業されたアジアでも古い歴史を継ぐメーカーで、創業当時にイギリス人から学んだ製法を忠実に守っています。それにしてもイギリス人は凄いです。ライオン社の工場がある中部高原のヌワラエリアにはビール工場の他にも、アジアで最初に出来たゴルフ場(1889年創業)、競馬場、イギリス式のホテルやパブ等、暑いスリランカで故国イギリスに近い環境で快適に過ごす為には、涼しい高原地帯を開発する労を惜しんではいません。今風に言えばリゾート開発ですね。ライオン社の他にもスリーコインやカールスバーグ等のメーカーが美味しいビールを製造しているので、スリランカを訪問された際には是非とも呑み比べて下さい。

コロombo市内にはお酒を飲める店がたくさんあります。ホテル内の格調高いバーでコニャックやウィスキーで一杯、オイスターバーでよく冷えたワインで新鮮な牡蠣をペロリ、僕の大好きなサマーガーデンレストラン(2007年9月号参照)でホテルを相手にビールを一杯、横丁の立ち飲み屋でアラックを一杯と、ピンからキリまで多くの飲酒できるお店があります。ドイツやフレンチ、イタリアン、スイス等の欧米料理、日本を始めとしたアジア各国の料理を楽しめる店も増えて来ています。超近代的なホテルや高級レストランで飲むお酒も、勿論美味しいのですが、

僕個人的には少し古めいた場所で飲むのが好きです。ゴルフフェースホテル(1864年創業)のテラス、コロomboの南約12kmにある岬の先端に建つ歴代のイギリス総督の別荘であったマウントラヴィニアホテルのテラスでインド洋に沈む夕陽を眺めながら呑むお酒は時を忘れて落ちて行く夕陽に見入ってしまいます。

ゴルフフェースホテルの道路向いにあるバヴァリアンはドイツ料理の老舗でこの店で飲む生ビールも美味しいです。こんなピン(高級)な場所ではなくても好きな場所が沢山あります。大概がキリに近くどちらかと言えば薄汚い様な場所で、冷えているビールが無かったり、氷が無かったりするのですが友達やその又友達と、スリランカ料理を肴に飲むのが楽しい場所です。ただ周りの人からジロジロ見られるのが苦痛ではあります。

コロomboの様な都市ではなく、仕事先の田舎の村で相手の自宅に招かれて夕暮れに溶け込んでいく田園風景を舐めながらゆったりとした気持ちで呑むアラックやビールも格別のものでした。大した酒の肴があるわけでは無いのですが、家族全員で持て成してくれているのが手に取る様に判って嬉しくなります。こんな時には、親戚やら隣人友人達がお酒や食べ物を持って集まり、大宴会になる事が多かったのも楽しい思い出です。

類は何とか言うように僕の友人達も、ホテル内で宝石屋を営んでいるイスラム教徒のハッサン氏を除いて皆酒飲みばかりです。お祝い事等(本当は理由は何でも良いのです)がある毎に誰かしらの家に集まっては持ち寄った大量のお酒を飲みます。お酒の肴と食事の準備が終わると裏方にいたご婦人方も酒宴に参加し、お酒が回ってくると歌ったり踊ったりと忙しくなります。僕が駐在員でスリランカに住んでいた頃は、女性が家の外でお酒を飲む光景は、一部のセレブの方々を除いては見る事が出来ませんでした。最近のコロomboでは女性だけのグループでお酒を飲んでいる姿が見られる様になりました。

コロombo以外の都市でも飲む場所の雰囲気は同じ様なものだと思いますが、農村などではまだまだ表立って飲酒する事は憚れるようで、男達が集まってこっそり飲んでいるようです。でも、結婚式等のパーティの席では大っぴらに飲んでもいいようです。どれ位のグレードのお酒と量を集められるかによって主催者の力量が計られているようです。

(続く)

土地の男達との不思議なピクニックは、鳥葬が終わるまで続いた。

鳥葬師が遺体の最後の骨まで細かく砕いて与えてしまうと、それまで激しく餌を奪い合っていた鳥たちも満足したのか、一羽、また一羽と上空に舞い上がっては空の彼方に消えていき、いつの間にかだいがその数を減らしている。その際にやってきたカラスがちゃっかりハゲワシの群れに混じって、残り物のご相伴に預かっていた。

丘の上で鳥葬を見物していた旅行者達も葬儀の終わりを察して切り上げる事にしたのか、丘から下りてくると私達の脇を通り過ぎ、近くに止めてあった車に向かって歩いて行った。最後に丘から下りて来たキリスト君は私と眼が合うと足を止めて言った。

「俺たちはこれから街に帰ってランチを食べに行くんだが、君も一緒に行くかい？」

髪やヒゲがだいが伸びているところをみると長い旅をしているのかもしれない。感じの悪い人ではなかったし、ゆっくりとそんな旅の話を聞きたいような気もしたが、私はまだ土地の男達とこの場において完全に鳥葬の儀式が終わるのを見届けたかった。

「ううん、私はもう少しここにいる」

「そうか、じゃあな」

キリスト君は片手を上げて挨拶すると他の旅行者達と車に乗り込み、鳥葬場から去っていった。

遠ざかる車を見送った後、私はフと自分の置かれている状況に気が付くと一瞬緊張に身体を硬くした。旅行者達が立ち去ってしまえば、私以外にこの場に残っているのは、鳥葬師と見ようによっては山賊の様な風体をした土地の男達だけじゃないか……！ もしここで彼等が強盗にでも変身したら誰にも助けて貰えない。だが、敷物の上でおもいおもいに寛いでいる男達は、私の存在など殆ど問題にもしていない様子で和やかに談笑を続けていた。

しばらくすると丘の上で作業していた鳥葬師も全ての仕事を終えたのか、荷物を纏めて丘の斜面を下って来た。手には大きな袋のようなものを持っている。彼が何を行うのか見たかった私はピクニックの輪の中から立ち上がり、鳥葬師のそばに歩み寄った。血まみれのエプロンで胸から下を覆っていた鳥葬師は、どこか他の理塘住民とは少し異なるように感じられる容貌

の、やけに肌の色が黒い男だった。いくら鳥葬が一般的なものとして行われているチベットの住人でも、希望してこのような職業に就く者はいない様に思えたし、男が何となく他の住民と違っているような印象を受けた事からも、鳥葬師はきっとその職業に就く事を代々定められた一族の人達が行っているのではないかと思われた。

もし私の想像通りなら、このような職業に就いている男達はどのように街で暮らしているのだろう。妻や子供はいるのだろうか？ 他の理塘住民とは普通に付き合いがあるのだろうか？ 小さな疑問が次々に心の中に浮かんで消えていく。

男は傍に寄ってきた私にかまう事も無く、厭うような様子も見せなかった。仕事から解放された安堵からか、どこか楽し気に見える笑顔を浮かべ、丘の麓まで運び降ろした大きな袋を、燃え残りの薪が薄く煙を上げていたゴミ焼き場のような場所に投げ入れて、鳥葬師の仕事は完全に終了したようだ。袋の中にはいったい何が入っていたのだろう。きっと遺体が身につけていた衣服や頭髪などでは……？ と想像したが、何となくあれこれ質問する事が憚られ、はっきりした事は確かめ損なってしまった。

簡単にブロックで囲われた焼却場で、火にくべられた袋がチロチロと炎を上げ始めたのを見ていると、友人に面影の似た男が声をあげ手招きして私を呼んだ。

「おーい、鳥葬は終わりだ。街に帰るぞ」

見れば鳥葬師の仕事が終えたのを期にピクニックも終了したらしい男達が、帰り支度を始めている。あれほどたくさんいたハゲワシ達もいつの間にかほんの数羽を残して姿を消していた。

本当は袋が燃えて中に包まれていたものが姿を現すところを確認したかったが、郷に入らば郷に従えだ。私は後ろ髪を引かれつつその場を離れて男達のいる場所に戻った。

「だって火が燃えているままだよ。このまま帰ったら危ないんじゃ……」

だがその場にいた男達は「大丈夫だから放って置けばいい」と全く意に介さない様子だ。焼却場はブロックで囲われているし、こんな草原の真ん中では燃え移るものもないという事なのだろう。

ピクニックの男達は荷物をまとめると止めてあった

車に乗り込んだが、一人だけ自分のバイクで来ていた友人似の男は、私を呼ぶとバイクの後ろに座るように言った。えー!! この草原の中でカムパ(この地方のチベット族の男)のバイクに二人乗りするの!? 私は内心歓声をあげていた。この土地に初めて訪れた時から憧れていた、草原の中でバイクを駆る男達・・・その風景の一部に自分も加わるなんて素敵じゃないかー!!

もし、そのまま何処かに連れて行かれちゃったらどうする? そんな囁きも心の中をかすめなかった訳ではないが、初めて会った時から直感でこの男は信頼できるとの気持ちを抱いていた私は、躊躇無く彼のバイクの後ろに跨った。だが走り出してみれば、全くそんな心配には及ばなかった。男のバイクはかなりのポンコツで、二人を乗せた重い車体を喘ぐように動かしてゆっくり走り始めると、最高に加速してもたいしたスピードは出ていない。道が上り坂に差し掛かったところでは、とうとう耐え切れないというようにブスン、ブスンとエンジンを止めてしまった。

男は照れ笑いを浮かべると、私に一旦バイクから降りるように言い、軽くなった車体をゆっくり坂の上まで走らせた。バイクが古い事もあるだろうが、もしかしたら標高が高いせいもあるのかもしれない。私が以前バイクのツーリングで日本国内を走り回っていた時も、標高の高い山道の登り坂ではバイクが馬力を失い、いくらアクセルを回しても頼りなくスピードを緩めて走る事しかできなくなっていた事を思い出した。そんな日本の山道と比べれば、この理塘は街の標高が4000メートルを越えている。そんな土地で軽快にバイクを走らせるには当然何かの調整を行わなければならないだろうが、男のバイクはそちらの手入れがあまりされていないのかもしれない。

坂が下りに差し掛かるところで、私は再びバイクの後部座席(荷台?)に乗せて貰い、バイクはゆるゆると私達を理塘の街まで運んでくれた。住宅の並ぶ街の中まで来ると

「君は何処に滞在してるんだ?」

と男が私に尋ねたので、適当に宿の方向を指差して見せると、街の目抜き通りまでバイクを走らせた男はそこで一旦バイクを止めた。

「俺はこの先まで行くから、あんたはここで大丈夫か?」

男の家は街の中心を通り過ぎた、まだ先にあるらしい。行きずりで知り合っただけの私を、彼はちゃんと紳士的に安全で不便のない場所まで送り届けてくれた

のだ。

「どうもありがとう」

お礼をいうと男はいかつい顔を緩めて笑顔を見せた。大きな短刀を腰に携え荒くれ者のように見える風貌だが、笑顔になると目が優しい。シャツのボタンをキチンと襟元まで留めているのが男の真面目な性格を現しているようで好ましく思えた。

私は勝手に親しみを感じていた男とそのまま別れてしまうのが少し名残惜しい気がして「あなたの名前は何ていうの?」と訊ねてみた。「ガンマンマ」と名乗った男は、「此処に字で書いて」と私が差し出した手帳はやんわりと拒否して、自分は字が書けないんだと戸惑いと照れの混じったような顔をして言った。

彼が家の方向と指差したのは街の中心を通り過ぎ草原の方に向かう道だ。そんな大草原の真ん中で暮らしている彼等には文字など必要ないのかもしれない。自分でその名を手帳に書きとめた私が、お礼とお別れに握手を求めて差し出した手を握ると、男は再びポンコツのバイクに跨り去っていった。

鳥葬という(日本人の感覚では)凄惨な儀式を目にしてきた後だというのに、何となく暖かい気持ちが心の中に残っていた。ガンマンマなんて・・・西部劇のガンマンみたいな風貌をした男のイメージにピッタリじゃないの。手帳に記せずとも、きっと忘れない名前だろう。ちょっと名残惜しい気持ちでガンマンマの後ろ姿が見えなくなるまで見送ると、私はくると踵を返した。男のバイクに跨っていた時から、この後何処へ行くのか私の気持ちは決まっていたのだ。

私の足は再び鳥葬場に向かっていた。男達に呼ばれた時、私の気持ちはまだその場を離れたくなかった。だが土地の人間に逆らって一人その場に残るのはあまり賢明な行動とは思えなかったし、ガンマンマのバイクに二人乗りさせて貰った事は嬉しく、それは理塘の思い出として意味のある事だったので鳥葬場に戻る事が二度手間になるのは全く問題なかった。時間はたくさんあるし、私は鳥葬の終わった場所がどうなっているのか、もう一度その場に行きたくてじっくりと確かめたかったのだ。

既に何度も通ってすっかり馴染んでしまった道をスタスタと歩いて誰もいない鳥葬場に戻った。気になっていた焼却場の燃えかすはまだ薄っすらと熱を持っていたが、袋は既に完全に灰になっていて跡形も無い。あれ

程集まっていた鳥達は何処へ行ってしまったのか一羽残らず姿を消して、辺りは完全な静けさを取り戻していた。自分が何故これほど鳥葬に惹かれるのか自分でもよく判らなかったが、私はゆっくりと葬儀が行われていた丘に登ってみた。鳥葬師が骨を砕く作業台として使っていた石は、既に血に濡れていた形跡など感じさせないほど乾いている。不思議な気がした。本当にここで人の身体が解体されるなどという事が行われていたのだろうか。思い切って鳥達が群れ餌を奪い合っていた辺りを歩いてみると、地面が薄っすらと湿気を帯びフワッと血の匂いが感じられる場所があった。2日前、初めて私が鳥葬場を訪れた時に見ていたのと同じ、瀬戸物の破片のような細かい骨片が地面に散らばっていた。

このわずかな、ホンの小さな骨の欠片だけが、故人の身体の名残なのだ。そこで人の身体がバラバラに刻まれた場所なのだを知っていても、私には特に恐ろしいとは感じられなかったし、骨片はただのカルシウムの欠片だった。自然から与えられた肉体が役目を終えて自然に還っていった。ただそれだけの事なのだ。

チベット族の人々が鳥葬という葬儀法を選んでいるのは、チベットの風土に合っている方法だという理由もあるが、鳥の体内に取り込まれた肉体が空を舞うことにより、故人を天に送り出すという意味も込められているのだそう。他国の人間からは一見残酷な風習のようにも思われがちだが鳥葬という事は、確かに人が解体される様子やハゲワシが餌を奪い合う姿など、見ていて全く美しいものでは無かったが、それでも死後跡形も無くこの世から消えてしまう潔さは好ましく思われ、私にはロマンチックなものに感じられた。

私も自分の命が尽きる時は、このように自然に還りたいという気持ちが強く湧きあがってくる。鳥の餌でも魚の餌でも構わない。せめてこの肉体が土壌を肥やし小さな花でも咲いてくれたら嬉しく思う。火葬場で焼かれ骨になった身体を小さな骨壺に入れられて、地面に作られたコンクリートの狭く暗い部屋の中に半永久に閉じ込められ、自然に還る事さえ適わぬまま存在し続けなければならないなんて絶対にゴメンだ。人の弔いに対する習慣や受け止め方は国や宗教や個人によって様々だろうが、役目を終えた生命は、自然のリサイクルの輪の中で他の生命の為に役立つ存在である事が、この地球に生かされている生命体として本来のあるべき姿なのだと、

私は気の済むまでその場で過ごしながらずっと繰り返してそんな事を考えていた。

そんな時、誰もいない鳥葬場の丘の上で一人葬儀の余韻に浸っていた私は、先ほどまで鳥葬が行われていた場所に新しく置かれていたマニ石にその時初めて気付くとハッとしました。チベット語で祈りの言葉が掘り込まれ、美しく彩色されたそのマニ石には見覚えがあったのだ。

え!?・・・それは確かに私が北京軍団と共に稻城から理塘までやって来た日に、理塘寺院前の参道で売られていたマニ石だった。あの場に並べられていた石の中で一番美しく、北京軍団がそれを購入しようかと思案していた脇で、私が彫りこまれた祈りの文字を手帳にスケッチしたマニ石に間違いはない。小さな街の事でマニ石屋などそう多くはないだろうし、考え過ぎだとは判っていたが、それでも強く印象に残っていたマニ石と思わぬ場所での再会に何か不思議な縁の様なものが感じられる気がした。

その石を見つけた事で次の目的地が決まってしまった。これから再び理塘ゴンパ(寺)にお参りに行き、あのマニ石屋に立ち寄って3日前に見たマニ石が消えているのを確認しに行くのだ。

勿論間違いなくあの石は無くなっている筈だが、既に目的を果たして満足してしまった理塘の街で他に特別やりたい事など無かったし、初日に訪れたお寺のただずまいと本殿の裏に隠されていた大仏には強く心を惹かれていた。もう一度あの場所を訪れて、この土地で出会った様々な出来事や良い旅が続けられている事をチベットの神様に感謝したい・・・。

不思議な縁で次に目指すべき場所を見つけられた事を嬉しく思いながら、鳥葬場を後にした私はお寺に向かって歩き始めた。 (続)



無数の祈祷旗がはためく鳥葬場

毎年5月第4週末、川崎市立麻生市民館（小田急線/新百合駅北口直前）利用団体を実行委員として開催される恒例のあさおサークル祭が、今年も5月28・29日の両日開催されました。わんりいの今年度の企画は、ケーナ演奏・馬頭琴の演奏・黄土高原のドキュメンタリー映画の3本立てでした。

【ケーナの演奏会】

5月28日(土) 10:30～11:30

於：麻生市民館・視聴覚室

サークル祭参加企画の「わんりい」の一番バッテリーは、2009年度と2010年度に「TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル」と共演の山下孝之さんのケーナの演奏でした。当日は生憎の雨空、午前中の開催で入場者数を心配したが、それも杞憂に終わり、延べ30人以上の人々が山下孝之さんの美しいケーナの音色を楽しみました。

演奏の曲目は、「グノーのアベ・マリア」「コンドルは飛んでいく」「もののけ姫」に続いて、日本の曲メドレー（夏は来ぬ・夏の思い出・浜辺の歌）と「七里ガ浜の哀歌」。更に、江ノ電開業100年記念事業で公募され、2400曲の中から選ばれて特賞を獲得した「江ノ電の歌」他、山下さんのオリジナル曲3曲「中津川に沿い」「彼岸花」「Serene Sea」やシルクロードのテーマと盛り沢山で、1時間があっという間に過ぎてしまった。それにしても1時間休憩なしでケーナを演奏され、どんなにかハードではなかったかと案じられた。

「コンドルは飛んでゆく」のようなケーナの音色で馴染んだ曲もあったが、メロディーは聴き慣れていてもケーナでの演奏は初めてという曲が多く、特に日本の曲メドレーは、いつもに増して胸に染み渡る懐かしさを感じた。

山下さんのオリジナル曲「Serene Sea」では、山下さん初めての試みとして、スクリーンに美しい風景の映像を映しながら演奏して下さった。波が寄せては返す浜辺の風景や木漏れ日がちらちらと踊る林の景色などを眼にしなが、あたかも自然の中でリラックスしているような気持ちを味わうことが出来た。文字通り、癒しの音楽という印象だ。

1時間の濃密な演奏の後は、皆さん演奏者の山下さんの周りに集まって、竹の選定から音程に合わせて孔を開けて透明な塗料を塗るまで全て独りでこなして完成させたケーナの話や、映像の撮影の話などを伺った。

輪の外で控えていた私に一人の女性が寄って来られて、「時間がないので帰りますが、どうぞ後程、『素晴らしい演奏で、思わず涙がこぼれるほどの感動を覚えました。楽しい時間を有難うございました。』とお伝えください。」と言い残して帰っていかれた。来年のあさおサークル祭も、山下さんに是非お願いしてケーナの演奏を聴きたいと願っている。（報告：有為楠君代）

【TOKYO万馬・馬頭琴アンサンブル/演奏会】

5月28日(土) 15:30～16:45

於：麻生市民館・視聴覚室

台風が近づく生憎の天気の中、サークル祭では恒例になったTOKYO万馬・馬頭琴アンサンブルの演奏が披露されました。年月を重ねてすっかりご自分たちのものになっている曲を次々と演奏して下さり、目を閉じてモンゴルの大草原の情景を思い描きながら聴かせて頂きました。

今回は、万馬アンサンブルのコンサートマスターの西郷美炎子さんがご都合でいらっしやれなくなり、演奏者が三人で少し淋しかったのですが、万馬馬頭琴アンサンブルの生みの親であり、師であるチ・ブルグッドさんが応援で、「牧歌」という曲を演奏下さいました。その情感あふれる音色にすっかり魅了されてしまいました。また、来年の馬頭琴アンサンブルの皆様の演奏を楽しみにしています。（報告：鈴木千佳子）



右から 高木和恵 永瀬正博 池谷禎俊 の皆さん

▶ビデオ上映会

【ヤンガー・ミンガー・サンワー】

5月29日(日) 14:00～16:00

於：麻生市民館・視聴覚室

「黄河のほとりで歌いたい」 岩田温子

陝西省の黄河のほとりの村に住み着いて、剪紙と人々の暮らしとの関係を研究している丹羽さんの「サンワー村」での人々の暮らしを撮したビデオを拝見しました。

まず赤い服を着て口バにまたがり輿入れをする花嫁が映し出され、そこに流れている賑やかなチャルメラやシンバルの音が耳にはいると思わず足でリズムを取り始め、次にてっぺんまで丁寧に耕されている山々がずっと続いている黄土高原の景色になぜか胸がキュンとなり、嫁迎えのために窓の棧に美しく貼られた様ざまの剪紙には目も心も画面に引きずり込まれ、最後まで気分は黄土高原の空の上を漂っていたような楽しいビデオでした。

美しい映像の他に特に印象に残ったのは丹羽さんの下宿先のお父さん、年は60歳近い毛水源さんでした。新中国誕生後まもなくの頃に生まれ、いくつもの政治のうねりの中で、今でも最貧困地域である黄河流域の村で農民として生きてきた人です。小学校だけは行けたものの、級友が皆中学へ進む中、家のあまりの貧しさに一人だけ泣く泣く十三才で学校をやめて開墾労働に加わり、それ以後は仕事の中でいろいろなことを自分で学んできたと話しています。そして「もっと学校で勉強をしたかった」と悔しそうに語っていました。しかし、映像の中に出てくる毛さんはとても知的で広い度量をもった人に見受けられました。それは、県の役人からの依頼とはいえ、外国人を自分の家に泊ませ(丹羽さんによると宿泊代も受け取らないとか)、身元引受人として丹羽さんと村の人々とを繋げる手伝いをしているということから思ったことです。

画面の中で丹羽さんが村の家々の位置関係を確かめるために地図を作ろうとし、毛さんと一緒に村人を訪ねる場面がありましたが、その時その村人は「スパイではないか」と毛さんに訪ねていました。さんわ一村のある黄河流域は少し前まではとても交通が不便で、外との往来もあまりない、閉塞した社会環境でした。改革開放が叫ばれて久しく、今ではテレビやインターネットで外国の情報もどんどん入ってくる時代になりはしたものの、いまもなお昔の記憶を引きずって暮らしている人たちが住んで

いるところでは、若い女性とはいえ外国人をひきうけるというのは大きな勇気があることだなあというのが正直な感想でした。画面の中の毛さんは終始穏やかな笑顔を絶やさず、村人に丹羽さんの意図を説明していました。

一つ、毛さんが懐かしそうに語ったことで、私も懐かしく思い出し、面白いと思ったことがありました。それは『また歌を唄いたい』と言ったことです。毛さんによると昔、集団労働時代(人民公社制の時代) やさまざまな政治運動があったときよく歌が唄われたそうです。集会の前に歌、途中で歌、最後に歌を全員で唄ったのだそうです。当時、唄われた歌は毛主席や共産党をたたえる歌であったり、政治運動を鼓舞する歌だったりでしょう、それでも毛さんは全員で声と心を合わせて唄う喜びや感動を素直に懐かしんでいました。

ちょうど同じ頃だと思いますが、日本でも歌声運動と呼ばれた活動や歌声喫茶なるものが登場し、大勢の若い人たちが集まって歌を唄って楽しんだことを思い出しました。詳しいことは分かりませんが、そもそもの始まりはもしかすると共産党の宣伝活動に由来するものなのかも知れません。メーデーのデモ行進で「ああ、インターナショナル」が唄われていましたし、歌声喫茶の歌集にも始めのページに掲載していましたから。でも日本ではいつのまにか叙情的なロシア民謡や山登りやハイキングの歌に替わってゆき、幸いなことに平和な暮らしと青春を謳歌するものになりました。

今、その当時若者で熟年世代となった人たちが当時を思い出し、みんなで声を合わせて唄うということに懐かしみを感じ、歌声喫茶が復活したり、歌を唄いながら都内を遊覧するバスツアーが出来たりと、ささやかなブームが起きているのだそうです。国と政治状況は違っていたけれど、ほぼ同じ頃に同じ年代の若者が歌を唄うことに喜びを感じていたなんて。なんとなく毛さんに親しみを感じてしまいました。

毛さんはまた昔から人々の暮らしの中で唄い継がれてきた仕事歌や恋の歌など民歌と呼ばれる歌が段々と唄われなくなってきたことをとても残念に思っています。村の少年になんとか正調の歌い方を教えようとして熱意のあまりしつこくなり少年に逃げられてしまった場面がありました。毛さんが元気な内にたくさん民歌を唄ってもらって、村の若者達の耳に記憶として残ればいいなとも思いました。

いつか毛さんと一緒に黄河のほとりで歌を唄い、民歌を聞かせてもらいたいなあと夢に見ています。

《日中友好会館・美術館の催し》 ～編むかたち、織るころ～ **中国竹草工芸展**

中国の人々の暮らしの中から生まれた精巧な、中国民間伝統工芸である竹細工と草細工・75点

主催：日中友好会館・中国文化部対外文化聯務局 後援：在日中国大使館・他

会場：日中友好会館・美術館
入場料無料

2011年8月1日(月)～8月17日(水)(休館/土・日)
10:00～17:00(初日は14:00～)
〒112-0004 文京区後楽1-5-3
JR飯田橋駅・徒歩7分
都営地下鉄飯田橋駅・徒歩1分



● 問合せ：(財)日中友好会館・文化事業部 ☎03-3815-5085 担当：末森、小暮

【新潮劇院プロデュース】

「京劇の世界」～中国伝統芸能への誘い～

2011年7月23日(土)開演 14:00(13:30開場)
新宿区・四谷区民ホール(地下鉄丸の内線新宿御苑前駅5分)

地図は http://shinjuku-kuminhall.com/pc/pdf/yotsuya_map.pdf

前売：3,800円(新宿区民3,300円/高校生以下2,000円)

*当日券は各500円増しです。

▶ 出演

殷秋瑞、張桂琴、張春祥、張小山、塚田拓也 他
京胡：許佳/月琴：神山志郎/司会：張烏梅



▶ 京劇レクチャー 加藤徹(明治大学教授)

チケットの申込み：080-3486-3352(担当：梅木)

主催：新潮劇院、後援：中国大使館・文化部、新宿区

劉薇と国境なき音楽の仲間による震災チャリティコンサート

劉薇/山口直美(ヴァイオリン)、丸山滋(ピアノ)、小川和隆(ギター)
チ・ブルグッド(馬頭琴)、クリストファー遙盟(尺八)

2011年7月9日(土)、19:00開演(18:40開場)

成城ホール(小田急線成城学園駅北口徒歩4分)

地図は <http://www.seijohall.jp/access.html>

3,500円 全自由席

申込み：☎03-3789-6518(エム・バイ・ミュージック)

【中国文化センターの催し】

「2011年7～9月 中国映画上映会」

<http://tokyo.cccweb.org/jp/sy/zxgg/7881.shtml>

*無料 *全席自由席 *定員：先着50名

*各回金曜日(Mは木曜日) 開催 15:00上映開始(14:30開場)

【お申込み方法】 申込者氏名/電話番号メールアドレス/鑑賞希望作品番号(A～N)/同伴者の人数を明記し、ccctok@hotmail.comに連絡の上、当日、直接開場へお出で下さい。

A	7月1日	『天安門』	94分	中国語(中/英)
B	7月8日	『定軍山』	98分	中国語(中/英)
C	7月15日	『囲碁王とその息子』	95分	中国語(日)
D	7月22日	『宝蓮灯』アニメ作品	81分	中国語(中)
E	7月29日	『雲水謠-THE KNOT』	110分	中国語(日)
F	8月5日	『変面-この權に手をそえて』	97分	中国語(中)
G	8月12日	『天堂凹-FREEWAY』	98分	中国語(中/英)
H	8月19日	『地下鉄3号線』	95分	中国語(日)
I	8月26日	『田舎の結婚-COUNTRY WEDDING』	90分	中国語(日)
J	9月2日	『クレイジー・ストーン-瘋狂的石頭』	100分	中国語(中)
K	9月9日	『胡同裏的陽光-HUTONG DAYS』	100分	中国語(日)
L	9月16日	『絶代-THE LAST HEAD WOMAN』	85分	中国語(日)
M	9月22日	『クレイジー・レーサー-瘋狂的賽車』	100分	中国語(中/英)
N	9月30日	『建国大業』	140分	中国語(日)

※カッコ内は字幕の言語です。中/英は、中国語及び英語の略です。

【わんりいの催し】

ブラジル料理ってどんな味? ブラジル人ご夫妻が直接ご指導の「ブラジル料理の会」

ブラジル料理を作って味わおう!

指導：藤沢レナート茂雄&グロリア

2011年8月27日(土) 11:00～14:00

場所：町田市民フォーラム・料理室

<http://www.city.machida.tokyo.jp/community/shimin/com/com14.html>

〒194-0013 町田市原町田4-9-8/JR横浜線町田駅ターミナル口徒歩3分、小田急線、町田駅南口徒歩10分

参加費：1500～2000円

(講師謝礼、会場使用料、材料費など)

定員：15名～20名(定員になり次第締め切ります)

講習予定料理

①フェイジョアード：ブラジル料理を代表する黒インゲンのシチュウ

②ファロハ：ベーコンとキャサバ(芋)の粉の炒め物

③ケールの炒めもの

(デザートとブラジルコーヒー付き)

講師夫妻からブラジルのお話を伺いながら作った料理を楽しみましょう!

● 申込み：わんりい ☎042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

【7月/8月の定例会と9月号の発送日】

◆ 定例会：7月7日(木) 8月9日(火) 13:30～(田井宅)

◆ 9月号のおたより発送日：8月30日(火) 13:30～
8月は「わんりい」の発行はありません。皆様よい夏を!!